

イザヤ書 イザヤ58章9b-14節
ヘブライ人への手紙 12章18-29節
ルカによる福音書 第13章10-17節

本日の使徒書は、引き続きヘブライ人への手紙（ヘブル書）です。本日は、使徒書を中心に学びます。

先週の箇所は、「～すべての重荷や絡みつく罪を捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか。信仰の導き手であり、完成者であるイエスを見つめながら、走りましょう～」(ヘブル 12:1-2)で終わりました。この結論を受けて、14節から「キリスト者にふさわしい生活の勧告」という小見出しがついた部分が、29節まで続きます。本日の使徒書はその一部です。

聖書日課では省略されている箇所も含めて学びますが、ヘブル書はまず、すべての人との平和を保つこと、また聖なる生活を追い求めることを勧めます(ヘブル 12:14)。ここでの聖なる生活とは、単に自らを清い状態にするだけではなく、他者との平和的な関係が前提となっています。次に、主なる神様の恵から漏れないように、また、汚れずにいることを勧めます。それだけでは具体的にはよくわかりませんので、『聖書（旧約）』からエサウが譬えとして用いられます(ヘブル 12:15-16)。ここでもヘブル書が、『聖書（旧約）』の熟読を前提としていることがわかります。ことに、エサウが、「一杯の食物と引き替えに長子の権利を売った」というお話(創世記 25:27-34)は、有名であったようです。

これらを受けて、本日の箇所になりますが、18節以下は、一文が長く、訳文が一節を超えて続く場合もあり、その区切りも訳によって変わります。18節からは「あなたがたは、手で触れることのできるものや、燃える火、密雲、暗闇、暴風、ラッパの音、また、人々がこれ以上耳にしたくないような大声の言葉に、到達したのではありません」(ヘブル 12:18-19)と唐突に恐ろしい情景が語られますが、それは出エジプト記に記されている情景を思い起こせるように、鍵となる言葉を列記しているからです。ただし、よほど出エジプト記に精通していない限り、結びつかないかもしれません。しかし、ヘブル書が語りたいことは、キリスト者が到達したのは、『聖書（旧約）』の出エジプトで信仰者たちが体験したような滅びの場所ではなく、22節以下で語られる場所であるということです。22節から24節は、長い文書であり、「すべての人の審判者である神、完全な者とされた正しい人たちの霊、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血より優れたことを語る注がれた血です」(23b-24)が結論であるかのようにとれるのですが、「しかし、あなたがたが到達したのは、シオンの山と生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たち、天に登録されている長子たちの大集会、すなわち教会」が結論です。ここには、「教会」という言葉がありますが、新共同訳では「集会」と訳されていました(口語訳は聖書協会共同訳と同じく「教会」)。言葉としては、ほかの箇所で「教会」と訳される言葉ですが、本来の意味は「集会」です。新共同訳が「集会」と本来の意味で訳したのは、天のエルサレムにおける大集会(新共同訳「集まり」)との呼応関係を考えてのことでしょう。しか

し、今、キリスト者が集められる地上の「教会（集会）」は、天上のエルサレムと結びついているのですから、やはり新しい訳と口語訳の通りの「教会」がふさわしいと思います。キリスト者が到達するのは、『聖書（旧約）』にある事柄（ことに出エジプトで信仰者が直面した恐ろしい情景）ではなく、新しい贖いの仲保者であるイエス・キリストを中心とした天の集会に他ならないのです。

そうであるがゆえに、ヘブル書は、この贖いを受けるキリスト者は、贖いを告知する方を拒んではならないことを告げます（ヘブル 12：25）。その理由について、26節は、「**あのときは、その御声が地を揺り動かしましたが、今はこう約束しておられます。『もう一度、私は地だけではなく天をも揺り動かす。』**」と説明しますが、唐突に「あのとき」と告げます。それはハガイ書 2 章 6 節「**万軍の主はこう言われる。間もなく、もう一度私は天と地、海と陸地を揺り動かす**」からの引用だと思いますが、その箇所自体が、出エジプトの出来事に関する再解釈・再説明ですので、すぐに関連させて理解するのは難しいかもしれません。それを示すかのように 27 節で「**この『もう一度』という言葉は**」と説明が入ります。そして、揺れ動かないものが残るために、もう一度モーセの時に地が揺れ動いたように、揺れ動くものが取り除かれるために、更に激しく天地を揺れ動かせることだと解釈を述べます（ヘブル 12：26-27）。出エジプトの揺れ動く出来事、それがもう一度ある、つまり、今、キリスト者の周囲のある出来事は、揺れ動くことが多いのです。しかし、それら一つひとつに恐れおののく必要はありません。なぜならば、キリスト者は、新しい契約の仲保者イエス・キリストを通して揺れ動かない救いに与っているからです。それゆえに、ヘブル書は、「**このように、私たちは揺るがされない御国を受けているのですから、感謝しましょう。感謝しつつ、恐れ敬いながら、神に喜ばれるように仕えていきましょう**」（ヘブル 12：28）と結論付けます。キリスト者は、震われない国を受けているが故に、主なる神様に感謝し、恐れかしこみ、喜ばれるように仕えなくてはならないのです。最後の 29 節は少し恐ろしい言葉になっていますが、おそらく申命記 4 章 24 節の「**あなたの神、主は焼き尽くす火、妬む神である**」からの引用であり、恐ろしさの強調ではなく、そのような方と仲保者イエス・キリストを通して深く結びつくがゆえに、揺れ動くことのない安心があると語っているのです。

本日のヘブル書の箇所は、少し難解です。『聖書（旧約）』を熟読し、また深く理解していないとわからない部分が多くあります。ことに出エジプトの出来事における信仰者を揺れ動かすような出来事への知識を前提としています。おそらく、ヘブル書の時代も同じように信仰者を揺れ動かす出来事が多くあったのでしょう。それゆえに、大切なのは、揺れ動くものと揺れ動かないものがあることを知ることです。しかし、もっと重要なことは、教会が揺れ動かないものの象徴なのだということです。

わたしたちは、それぞれ大切なものが異なります。重要だと思うものが異なるのです。それが一致した場合には、平和を保てるかもしれませんが、異なる場合はそうはなりません。それらは、自分は絶対だと思っても、揺れ動くものであるからです。しかし、ヘブル書が示していることは、教会は、揺れ動かないものだということです。地上にある現実の教会は、決してそうではないかもしれませんが、「キリストにある平和を保つこと」と「聖とされること」を追い求めながら、まことの教会となるように目指し、歩み続けたいと思います。